

震災復興まちづくりと精神風土

岐阜大学工学部 正会員 秋山 孝正

1. はじめに

先般の阪神大震災に対する調査がすすみ、今後の震災復興の都市計画方針などが示されている。また一般出版物や報道により、膨大な情報や見解が提示され、各分野の評論の的になった。このような状況を踏まえて、本稿では都市の震災復興と精神風土の関係を検討し、都市復興の理念を模索するものである。本稿での著者の立場は都市環境と災害を考察する研究者であると同時に被災地域の関係者である。阪神大震災の5,500名以上の死者や多数の被災者の惨状、崩壊した神戸市の光景を直視することによって、物心ともに都市の復興の方向性を考えることができるのではないだろうか。ここでは、震災復興の地域精神を知るためのいくつかの事例を紹介する。さらに既存の都市計画の基本理念を検討することで、復興に向けての計画理念形成への留意点を述べる。

2. 震災復興における市民の精神

これまでに、筆者は阪神大震災において、被災した人々の心の問題について言及している¹⁾。通常、時間経過とともに精神的障害は軽減するが、かなり長期間その影響は続く²⁾。災害後の被災者の心の障害への救援体制や避難所や仮設住宅での精神障害についての問題が提起されている³⁾。

このような精神医療面の具体的問題については、他稿に譲り、本研究では「個人や家族と同様に、地域全体として災害の各局面でなんらかの反応パターンを呈する」⁴⁾地域の精神性についてのべる。

まず復興に関する市民の地域蘇生への精神が表出していると思われる具体的事例を紹介する。

(事例1)

建物の大部分を損壊した神戸市民に馴染みの深い2つの百貨店(大丸;元町・そごう;三宮)は、いずれも4月初旬に部分的ながら再開し多数の顧

客が訪れた(平成7年4月)。

(事例2)

ハーバーランドは、部分的な損壊はあったが、すでに4月頃より各種営業を開始しており、三宮周辺がなお混乱している時期においても、多数の若者が集っている(平成7年5月)。

(事例3)

本殿が無惨に倒壊した生田神社においては、改築工事がすすんでいる。そのため「御神体」は現在仮設住宅に安置されている。多数の参拝者が日常的に訪れている(平成7年11月)。

(事例4)

異人館のある北野町では、観光客も増え始めている。なお「うろこの家」など閉館中の場所もあるが、賑わいを取り戻しつつある。またこのあたりから街を眺望すれば、従来からの神戸の風景のようでもある(平成7年11月)。

(事例5)

休日の三宮は多数の人出で賑わっている。阪急駅ビルも旧来の位置に建設中である。この界隈で古くから駅ビルに入っていた映画館も営業を始めている(平成7年12月)。

このような事例は、いずれも民間の営業上の目的による復興という面もあるが、多くは庶民が一体となった都市活動への復帰を示すものである。

また人々の集積という点では、これらの活動は交通機関の復旧や物資流通の正常化に伴うものであることは間違いない。しかしながら、多くの事例から見て、個別の復興事業も本質的には「頑張ろう」という市民の精神を置いても実現の難しいものであると思われる。

3. 都市復興の理念形成と方向性

つぎに神戸市民の持つ防災と都市アイデンティティの意識について、既存計画資料をもとに検討する。ここでは現行の神戸都市政策の立案期と思

われる1975年「神戸市案」⁵⁾を資料とした。

まず防災理念について検討する。昭和45年当時すでに、神戸市の都市計画に関して全10項目にわたり基本的視点が示され、その第5番項目に「生命の安全を最優先とします」と唱われている。

また同書の「安全都市をめざす」という項では「六甲山系の特殊な地質は、都市化と結びついて、これまでがけくずれ、水害などの大きな災害を起こしてきました。また安全性に対する十分な配慮を欠いたまちづくりが進められた結果、交通事故、地下街などの火災、石油やガスによる爆発などの危険性が增大しています」⁵⁾と記されている。

神戸市の防災対策には自然災害中「地震」の発生は配慮されなかったが、「安全都市」「防災」は都市の要件として記されている。将来的には地震予知は早急には困難であるとしても、災害時に市民の混乱を最小限に抑える防災都市システムを目指したい。そして、今回の震災では情報伝達の混乱が招いた市民への精神的影響を無視できない。非常時における頑健な通信システムの設立が望まれる。さらに、神戸の地理的環境を考慮すれば、自然（六甲山系・沿海部）との共生に配慮したまちづくりが必要となるといえる。

つぎに、まちづくりの理念について検討する。平成7年2月11日に、兵庫県により復興計画案が提示されている。ここでは「効率性、利便性に重点をおいた従来の都市づくりを反省し、災害に強く福祉にも配慮した『人間中心』のモデル都市を目指す」⁶⁾との基本理念が示されている。

一方で、1975年の「神戸市案」を振り返ると、ほぼ同様な理念を表す記述が見いだされる。「都市の巨大化、都市活動の高度化による社会構造の変化は、都市における自然的、社会的、環境を著しくゆがめています。そこで、こうした諸々の問題を解決するためには、市、市民のひとりひとりが、新しい時代感覚の中で、より現実的に、より根元的な課題として『人間にとって都市とは何か』を考えていかねばなりません」⁵⁾

この両計画の理念には、文章表現で見ると、方向性に大きな相違を見ることはむづかしい。特に「都市のアイデンティティ」への配慮という意味においては、むしろ既存計画の理念を示した「神戸市案」のなかに強調されている感がある。

このように当該都市の市民生活と密着した計画が望まれるなかで、たとえば、都市を人体と考え、中国医学の気の流れに相当する「都市の気」を議論する風水論などの環境地理的な方法論の利用も考えてはどうかと思われる^{7),8)}。

4. おわりに

阪神大震災の反省や教訓を生かし、今後の都市復興に向けての問題点を検討することは重要である。都市計画における財政問題や法制度などの現実的な問題に加えて、「人の心を考えた都市のありかた」の重要性が再認識される。特に本研究では事例をとおして、「自然環境と共生できる都市」・「アイデンティティのある都市」を都市復興の理念に加えることを提案した。これは「一生活者の立場から生活感覚にもどついた」計画（前述「神戸市案」）を検討することにつながる。

都市市民の精神的復興は、擬人的な都市全体の復興をもたらすのである。阪神大震災の都市復興では土木技術者の「外科的」技術が議論されてきた。こうした技術的知見に加えて、都市生活の実状をよく観察し、都市市民の精神性を把握した具体的計画を実施するという「精神科的」技術についての議論の場が与えられなければならない。

参考文献

- 1) 秋山孝正：阪神大震災における災害心理と都市復興、土木計画学研究・講演集、18(2)、pp.597-600、1995.12.
- 2) 中井久夫編：1995年1月・神戸「阪神大震災」下の精神科医たち、みすず書房、1995.
- 3) 毎日新聞社：ドキュメント阪神大震災全記録、毎日ムック、1995.
- 4) B・ラファエル著、石丸正訳：災害の襲うときカタルストロフィの精神医学、みすず書房、1995.
- 5) 神戸市企画局：「緑と、心のふれあいと、生きがい」のまちこうべー ●人間都市神戸の基本計画神戸市案のあらまし、1975.
- 6) 朝日新聞社：朝日新聞大阪本社紙面集成 阪神大震災、1995.2.17-2.17、1995.
- 7) 渡邊欣雄：風水 気の景観地理学、人文書院、1994.
- 8) 三浦國雄：風水 中国人のトポス、平凡社ライブラリー、1995.